



自然環境とのつながり、
人とのつながりのあるべき姿を追求し
地域でゆっくりじっくり生きていく

大橋 三千雄 (おおはし みちお) さん 建築家、養鶏家、パーマカルチャーデザイナー

1963年千葉市生まれ。15歳から北海道で育つ。東京で2社、フランスで1社、札幌に戻り1社の建築設計事務所に勤務。個人住宅、公共建築、商業建築の設計に関わっていた。1997年に独立し設計事務所を設立。2016年に友人のいる豊浦町を訪ね、その3か月後には移住。現在はパーマカルチャーの実践者として地域循環型の養鶏を実践している。

北海道に移住（U・I・Jターン）して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。35回目となる今回は、豊浦町にIターンし、地域おこし協力隊を経て“農的暮らし”を実践して10年目になる、「大橋ビオピオ農園」代表の大橋三千雄さんにお話を聞きました。

パーマカルチャーとの出会いを教えてください

まず、聞きなれない方もまだまだ多いパーマカルチャーを一言で説明するとしたら、「石油などの化石燃料に依存する暮らしを改め、太陽の恵みを十分に活用して地球環境や人に配慮した循環型の社会を築く」というものです。そして、今自分は豊浦町で、地域の人たちとのつながりを大切にし、生活に必要なものが少しでも地域で循環するような生活の実践をしています。

もともと建築設計が生業で、35歳で独立した時に「地球環境と人間の健康を守る建物を作りたい」という目標を掲げました。ただ、環境と人の健康に気を使うと、イニシャルコスト（初期費用）がアップしてしまうという現実があります。その必要性を理解してもらえるように、2001年から地球環境と健康を学ぶ勉強会を企画し、自らも学びました。そんななかでパーマカルチャーに出会いました。当時を振り返ると、「暮らし全体をどう持続可能にできるか」を考えるなかで自分の専門である建築のほかに、自然とのつながりを目指すパーマカルチャーの考え方は自分のなかでとてもしっくりきました。2013年に世界共通のパーマカルチャーデザイナーという資格を取り、パーマカルチャー北海道を仲間と立ち上げました。ベランダや市民農園で野菜を育て、コンポスト*を使って循環を考えするという小さな一歩を踏み出しました。

豊浦町との出会いは？

パーマカルチャーと一緒に学んだ東京の友人が、豊浦町に移住したと連絡があり、遊びに行ったのが、豊浦町に足を踏み入れた最初です。真冬の2月でしたが、大好きな海や山が近いこともあり、いい所だと感じました。そして3月には役場を訪ねて、移住の可能性を探しました。

ちょうどその時、豊浦町では最初の地域おこし協力隊を募集していました。担当者が柔軟で親切だったということも私の背中を押してくれたように思います。私が田舎に移住したいことと、町が定住者を求めていることが一致。最初の協力隊で良くも悪くも自由さがあったことなどが決め手だったと思います。

地域おこし協力隊員としての3年間は？

1年目は、なんでも屋さんでした。所属は農政課でしたが、ホタテ漁師の手伝い、クマの檻おりを設置と幅広い活動で、多くの町民に出会う機会がありました。ありがたい時間でした。

近隣の市町村との交流も必要と感じ、西胆振いぶりの協力隊ネットワークを立ち上げ、洞爺湖町とうやこ、壮瞥町そうべつ、伊達だて

* コンポスト (compost)

生ごみや落ち葉、下水汚泥などに含まれる有機物を微生物の作用を利用して発酵・分解させて堆肥を作る容器。

市、白老町しらおいなどの協力隊員と定期的に情報交換しました。各地での取り組みや、抱える問題点がわかり、それにより自分の立ち位置が明確になりました。

2年目には、パーマカルチャー連続講座というタイトルで、農的暮らし見学会や実践講座を毎月開催しました。その1回目は、パーマカルチャー入門という題名で私が講師となりパーマカルチャーを解説しました。30人集まれば良いなと思っていたら、いろいろな協力もあり70人も集まりその後の活動に勢いがつきました。

3年目は、起業に向けての事業計画書を提出し、養鶏業を行うために協力隊終了時から卵の売り上げがあるよう1年間かけて準備させてもらいました。鶏は卵を産むまで約5か月かかるので、10月に最初のヒナが来るように、スケジュールをたててから、場所探し、鶏舎建設、研修に励みました。

平飼いで初生ヒナから育て、湧水を飲み、玄米を主食にすべて道産の自家配合のエサを与えて健康な鶏の卵を提供できるようにと考えました。

今後についてお聞かせください

養鶏については、スタートして数年間で安定しました。「BioPioクラブ」という会員制販売で会員さんには、これまで通り毎週配達して、玄関先でお話を聞くスタイルを続けていきます。

ホテル、レストラン、道の駅といった企業顧客と、遠方に暮らす方への郵送も維持していきたいです。ふるさと納税の返礼品としても認知されてきたので、これも情報発信を丁寧続けていきます。

今年、近隣の方から住宅を譲りうけ、最低限の修復をして引っ越しました。これから時間をかけてパーマカルチャーの学びの場所にしたいです。

ゲストルームをつくり宿泊可能とし、養鶏や建築、畑作りから料理までを一緒に学べる場にしていきたいと考えています。 (2025年7月取材)

インタビュー後記

フランスで設計を学び仕事をし、豊浦町で地域おこし協力隊員第一号になり定住した大橋さんは、評論家ではなく実践家。ほとんど知り合いがいない町に飛び込み、じっくり人脈を広げ活動内容も厚みがある姿は素晴らしいもので、お話を聞きながらワクワクしました。

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表